

Title	明治二十年の皆既日蝕を見て
Author(s)	横地, 石太郎
Citation	天界 = The heavens (1929), 9(97): 248-249
Issue Date	1929-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/161397
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

明治二十年の皆既日蝕を見て

横 地 石 太 郎

明治二十年八月十九日午後石川縣能登國綠剛崎燈臺下にて皆既日蝕を目撃した事があつた。此の時の日蝕は本邦に於ては多く降雨又は雲霧の爲め妨けられて充分なる観測は出来兼ねた様であつた、唯越後國南蒲原郡の永^{ヨウ}明^{メイ}寺山へ出張した伊澤修二氏等の一行のみが充分なる観測を遂げ得た云ふ事を聞いたが、綠剛崎に於ても日蝕の前後太陽の附近には一點の雲霧もなく幸に充分に見るこゝが出来たのであつた。

私は當時京都中學校在勤中であつたが、夏期休暇中で金澤へ歸省して居り、急に思ひ立ち、綠剛崎へ行き日蝕を見る事にして、同月十七日郡役所の在る飯田町に泊り、夕頃舊恩師なる郡長國枝逸麿氏を訪問した時、金澤高等中學校の北條時敬、田中鐵太郎、植原直松、學務課長の檜垣直右等の諸氏も其日同地を通過して同目的の爲め狼煙村に向ふたご聞き、翌日狼煙村へ行つたら高等中學校の連中は夫々観測上の分擔を定めて、しきりご豫習をして居たので私も同宿した。

十九日は午前より一同燈明臺下の草原に陣取り、時計を見て分秒を報ずる者、寒暖計を見て温度の變化を記すもの、コロナを寫す者、プロヂュベランス(紅焰)を寫す者等、夫々部署に就き、最後の豫習をなし、時の至るを待つた。檜垣氏と私は日蝕中遊撃隊として自由の行動を取り一般の景況を観察する役目となつた。朝の間は可なり曇つて居つたが、十一時頃より一天晴れ亘つたのは私等のためには至幸であつた。

蝕半以上に進みてより次第に温度の降るを覺へ、皆既少し前に海上の大氣中に皆既界限線の如きもの現れ、海面も際立つて色の濃淡を生ずるを見た。最後の光線が消ゆるご同時、バツト白金色のコロナが、黒きディスクの周圍に不規則に顯はれ、其のディスクの縁は薄紅のプロヂュベランスにて處々彩られ、萬星忽然として出現し、何ごも云へぬ崇美莊嚴なる感に打たれ、動悸昂進し、皮下に蠕動を覺ゆる様な心持して其光景は終身忘るゝこゝ能はざる底のものであつた。

暗さの低度は、最初は暗黒となつた様に感じたが、一分二分を経るに従ひ、次第に暗さは薄らぎ、濃灰色の青味を帯びたるものとなり、一般の明さは薄曇りの満月の夜程で、隔りたる樹木の枝葉などは分明ならず、外廓のみを見得る位で、懷中時計の針は七八寸許離して見る事が出来た。皆既になる前までは叢の中の蟋蟀や近處の鎮守の森の數多の鳥が喧しく鳴いて居つたが、最後の光線が消ゆると同時にピツタリと皆其の鳴を止めた。燈明臺も火を點するのを見た。

此時の皆既の時間は三分間餘で、短くはあつたが、コロナのスケッチを取るには充分の時があつたのであつた。けれどもあわてゝ居つた爲めに約一分間位の間に描き上げたので不完全なものとなつたのは遺憾であつた。

皆既の時には凡ての遊星が地平線上にあり、夫々の位置も豫め調べて置いたのであつたが、僅かに五倍の雙眼鏡のみを持つて居たのと、時の不足の爲め火、水、木、金、土の五遊星を見たのみであつたが、金星の如きは最も光度強くして、發光後三四十分間も肉眼で見るここが出来た。

事務室より

教室の新築中、一時、天文分教室の西室に移轉して居ります。新館の出来次第廣い所へ移る事でせうが、當分狭い所に居ります。従つて書類、用紙の整理も思ふにまかせず、御註文の品の發送も遅れた事もありませうがしばらく御容赦下さい。

二月號の出来が非常に遅れた爲、臺灣其他遠方の方々はブレテン舊號無代提供に對して御申込の暇が無かつた事と存じます。誠に御氣の毒ですから後日機を見て御送り致しますから至急御申込下さい。

天界七卷、八卷の簡單な合本が出来て居ります。御希望の方に實費で御送り致します。七卷は參拾錢。八卷は參圓參拾錢で、送料は何れも貳拾錢